少年 　海

芥川龍之介

　の海を知ったのは、かのである。もっとも海とはいうものの、の大洋を知ったのではない。ただの海岸にしいを知ったのである。しかししいも当時のにはだった。の歌人は海に寄せるを「のの海にいかり下ろしいかなる人かもの思はざらん」と歌った。はもちろんも知らず、の歌などというものはなおさら一つも知らなかった。が、日の光にった海のなにかにもの悲しい神秘を感じさせたのは、事実である。は海へ張り出したりの茶屋の手すりにいつまでも海をめ続けた。海はと輝いたけ船を何そうもかべている。長いを空へ引いた二本マストの汽船もかべている。の長い一群のカモメは、ちょうどのように鳴き交わしながら、海面をめに飛んで行った。あの船やカモメはどこから来、どこへ行ってしまうのであろう？　海はただかのの向こうに青々とっているばかりである。……

－18－